

伝のまったくない、従軍記はこれで完結です。

(ハロ収容所にて)

米軍将校曰く「貴方達は精神力では勝ったが物量に負けたんです」。

記録

比島戦五十万人。

内、泉師団レイテ戦死者一万六千九百九十八人、生還者三十六人、第二大隊九百七十四人中生還者五人。

収容所レイテ島ハロ収容所(フイリピン)。帰国アメリカ、リバテール船でハロ港出發。

浦賀港に昭和二十年十二月二十日帰国。

復員者三人(自分含)によって、国鉄安城駅に「復員者接待所」を町の青年団(自分は書記長)の協力を得て開設しました。

バターン島従軍記

福井県 大森 榮 一

鯖江は福井県の中央に位置し、神社仏閣も多く、また古墳群も確認されているものには幾多のものがあります。産業としては眼鏡枠製造は古くから知られ、現在は世界的にも有名で、その他、繊維、漆器などが盛んに行われてきました。また、西山公園は県下に誇る桜の名所として知られ、昭和三十年代に行われた町村合併によって鯖江市が誕生以来、つつじの公園として観光客で賑わっています。

このような経済的、自然・産業的環境にも恵まれた土地で育った私にも徴兵検査の日がやってきました。身長、体重共に兵隊にかりだされる心配ないと自他共に認めていた通り「丙種合格」でした。兵隊に行かなくてすむので、家業の漆器木工業技術習得に懸命に努めておりました。

昭和十八（一九四三）年六月、徴用令状がきて名古屋の会社に勤務しました。最初は知能テスト、手指の動作訓練テストの毎日でした。数日経つてから同僚数人の中で私一人だけ無線機組み立ての職場に配属されました。作業内容は小さなモーター、部品の取り付け、配線、ハンダあげなど細かな作業でしたが、私は家業の漆器木工業の木地加工で指先を鍛えておりましたので、組み立て作業の器用さに上司も驚いておりました。

徴用されて一年、やっと作業になれた昭和十九年六月一日、京都第四十二部隊通信部隊へ入隊せよとの召集令状が留守宅に届いたことが父より連絡あり、早速帰郷、入隊準備をしました。

六月一日早朝、親戚、知人、近隣の皆様に挨拶回りをして、親兄弟と別れの杯を交わし、多くの方々の見送りを受け、必ず元気で帰ることを誓い、鯖江駅を出発しました。午後、入隊手続を終え、三カ月前に入隊した先輩と起居を共にすることになりましたが、中に四、五人の二年兵がおり、こ

れから一カ月ほど私的制裁を受けることとなりました。

いつ動員下令があるか分からないので、射撃訓練、モールス符号の練習等、駆足教育でした。夜中どこからかモールスの「イトー」「ロジョーホコー」「ハーモニカ」と高い寝言が聞こえます。

七月十日ごろ突然、二泊三日の外泊許可が出ました。嬉しさもさることながら、帰郷の車中でいよいよ動員の日も近いと知り、緊迫感を覚えませんでした。七月十五日、新旅団編成の命令が下り、旅団名は鎧兵団独立混成第六十一旅団で、十七日までに編成を完結せよということでした。

編成内容

旅団司令部	旅団長	田島彦太郎少将
歩兵大隊	六個大隊	
砲兵隊	一個大隊	
工兵隊	一個大隊	
通信隊	一個大隊	
	編成時隊長	日下部幸雄

中尉

交替後隊長 長谷川学中

尉

馬匹隊 一個大隊

アパリ連絡隊 一個大隊

我々の師団通信隊（第四十二部隊）は葛西隊長以下若干名の留守隊要員を残し、新編成の旅団通信隊として原隊と別れ、伏見大亀谷の天理教会を兵舎として出勤まで待機しました。当時大本営は「ニミッツ軍」の南支攻撃を予想し、これに備えるため南支派遣兵力として田島旅団を編成したと聞きました。

昭和十九年七月二十四日、ついに動員発令され、我が旅団は南支派遣から急遽比島バターン、バブヤン諸島の守備隊としての派遣に変更されました。そして「田島旅団は八月二日門司港に集結せよ」との命で直ちに出勤態勢を整え、第五十三師団長による軍装検査を受けました。

昭和十九年七月三十一日未明、兵舎出発、伏見

桃山駅に向いました。沿道には深夜にもかかわらず出発を知ってか、家族が我が子、我が夫の姿を探し求めて隊列を追う姿が痛々しく思いました。

桃山駅より乗車、門司に向いました。深夜二時ごろ、京都駅にて小休止となり、ここでも家族の方であろうか、小さなノボリに名前をかけた旗を持つたり、遠慮がちに兵士を探し求める多くの人々で混雑しました。

昼食後出発、八月一日門司駅に集結、出航に先立ち輸送船に燃料、器材、食糧等を積み込み、民家で一泊しました。

昭和十九年八月二日、旅団は「白根山丸」「照国丸」「南嶺丸」に乗船、我が通信隊は「照国丸」に乗り、一路南下しました。輸送船は山口県の六連島沖に二十数隻が集結し護衛艦四隻に守られ南へと進みました。内地がはるかに霞むころ「ああ堂々の輸送船、さらば祖国よ栄あれ…」の歌声が甲板から聞こえ、多くの将兵は蚕棚の形に組まれ、ここに身動き出来ないほどの詰めでした。飲料水は

不足して、やっと口を潤す程度で、洗顔、洗濯には飯盒で海水を汲み上げて使いました。また排便は船の両舷に吊り下げた木の枠製の簡易トイレに跨り海中へ、下は千丈の海原、全く命懸けでした。

翌朝、早くも玄界灘で敵潜水艦に攻撃され、後方の一隻が火災を起こし「我攻撃を受け火災発生す、本船に構わず前進されたし、武運長久を祈る」と受信、船団は「全船戦闘配置に付け」の命令に緊張しました。輸送船には救命具は少なく、三人に一個とかで船には竹製の筏や大きな樽が積まれています。

護衛艦は爆雷を投下し、船団はコースの変更を強いられ支那沿岸寄りに南下を続けました。数日間、島影も見えず、船内の暑さに絶えず甲板に出る。南国真夏の直射日光が照りつきます。暑さと汗で風が繁殖し、この退治が日課となりました。

「照国丸」は古い船で速度が遅く、船団から遅れることがあって、心細かったものです。

出航して一週間ぐらい経って東シナ海で強烈な

台風に遭遇しました。このため敵潜水艦は影をひそめて精神的には安心しましたが船酔いに悩まされました。いつしか台風が納まり、海は再び無気味な静けさに戻りました。突如、司令部より「船団は台湾の北部基隆に寄港せよ」との伝達あり、何か救われた気分になりました。

しばらく静かな海を航海して台湾を目前にして突然、物凄い爆発音と共に船体は強烈な振動により揺れました。魚雷攻撃を受けたと直感、急いで甲板に上がりました。時午前十一時十五分、左前方を航行中の「新影丸」に魚雷命中、船体は二つに折れ、積載の兵器は海中に、将兵は船体に掴まり助けを求める者、海に飛び込む者、助けることも出来ず傍観するのみでした。

五分も過ぎないうちに巨像が倒れるごとく海中に没した。轟沈とはこの姿だと思いました。護衛艦の捜索、救助も空しく、船と共に海中に沈んだ多くの将兵に対して、御冥福を祈るのみでした。

翌日、基隆港に上陸、半数の船はここで南支方

面へと別れて行きました。半月ぶりの入浴で心身共に清められましたが、戦況は悪く、直ちに乗船、高雄に向け出航、昭和十九年八月十四日、湾内は機雷排除作業中のため、高雄港沖合いに投錨し、ようやく八月十七日高雄港に上陸しましたが、内地を出て半月の間に二隻の輸送船を失ったことになりました。

将兵の体力の回復をはかると共に、状況を見定めるために、しばし港内停泊し、一部の兵は下船して岸壁に露営となりました。ここでバシー海峡で敵潜水艦の攻撃を受けたものの難なく上陸した満州からの転進部隊と出会いました。

八月十八日、レイテ島決戦に向けての派遣部隊である第二十六師団を主力とした船団が、空と海からの攻撃を受け、護衛の空母と「大鷹丸」等、輸送船九隻が沈没あるいは大破して、三万六千人余りの死傷者が出る等の被害がでたため、輸送計画の見直し、護衛強化、さらに状況把握のため暫時ここに滞留を余儀なくされ旅団は、堀江国民学

校などに通信隊及び第四〇六歩兵大隊は港国民学校に宿泊することになりました。このため小学校の学生はバナナの木陰での授業に変更されました。一カ月近い待機の間、軍事訓練、使役、物資の調達、伝令等に奔走、暇を見て歓楽街の散策や買物をしました。驚いたのは、出発時内地では配給制だった。いろいろの甘味品が高雄では買える、バナナは台車一台百五十円等品物の豊富さと安さに驚きました。

一 中園少佐指導の高雄第二機動輸送隊の駆船艇、発動機船、木造船に分乗して空から赤トンボに見守られ、左記の各島へ向かい出航しました。

バターン島 旅団司令部、第四〇五歩兵大隊砲兵隊・工兵隊・通信隊、第四〇八歩兵二個中隊

イバヤット島 第四〇六歩兵一個中隊、

サブタン島 混成一個分隊、

バブヤン諸島の七島は、記憶並びにメモがはっきりしないので省略す。

昭和十九年十月二日、無事バタン島へ上陸、任

務はバタン諸島とバブヤン諸島の死守でした。

我々が上陸する前四月に台南歩兵第十二連隊補充隊一個小隊が大杉少尉指揮で宣撫活動を、五月には田村中尉が引率する一個中隊、引き続き横山少佐指揮の歩兵第三〇二大隊が派遣され、前記の部隊は横山大隊に編入されました。

横山隊長は、上海報道部長などを歴任された宣撫政策提唱者で、台湾から豚を取り寄せて畜産の奨励やその他の産業開発、さらに日本とバタネス州の共同流通会社を設立して貿易に努めていた。

また日本語学校を開校して長期戦に備え、とくに一万余りの島民に対しての軍紀は厳正に行い、島民から厚い信頼を受けるよう努力していました。

バターン島は北部に位置する州都バスコ、南へマハタオ、サンビセンテ、イバナ、ウユガなど幾つかの町村があり、経済的に恵まれます、僅かな牛や豚の畜産で生活している半農半魚の言わばその日暮しの家庭がほとんどでした。

島の広さは周囲八十キロ余り、南にサブタン島、

北方二十八キロにイバヤット島があり、住民はこの三島だけで、ほかの数島は無人数島で、総じてバタネス諸島と呼んでいました。また、バタン島は平坦地が少ないが、台湾とルソン島とのほぼ中間に位置し、小さい島ながら飛行機もあり、戦略的要素を備えていました。

十月十一日、比島作戦大綱及び指導要項の伝達が次のようでありました。

バターン、バブヤン地区は独立混成一個旅団を以て其の重要な諸島を固守し敵の進攻企画特に空海推進基地を封止す。敵の来襲に当たり我が空海軍の反撃に好機を与うる如く行動せしむ。この方面の陸上戦は守備隊独立を以て戦闘を遂行終止す。とあり、我が通信隊の任務はバタン、バブヤン

諸島への本部指令の伝達、情報の送受信、ルソン島、台湾、内地との交信、一日二・三回程度の状況通信、内外ニュースの傍受でしたが、妨害電波や混信で苦勞しました。有線隊は島内分遣先との架線の設営や保持、各部隊間の連絡等でしたが、

陣地構築作業が主でした。戦闘もなく比較的穏やかな毎日でしたが、暑さと疲労が重なりマラリア病が発生して、不殿曹長以下十数人の病死者ができました。

昭和十九年十月三十日、米ロッキード双発機による初空襲があり、飛行場近辺に被害ができました。完全に制空、制海権を奪われ、島は孤立状態となり、食料の調達もままならず、農耕班を編成して島民から休耕地を借り受けて大根、薩摩芋等の栽培や海水から塩造りに精を出しました。また長期戦に備えイラヤ山中に第二、第三の陣地構築が急速に進められ、密林から陣地用木材の伐採、兵舎の造営、防空隧道の発掘等激しい作業に体力の衰えを感じました。

そして日増しに敵機の来襲が激しくなり、日中は定期便のごとく偵察と空襲、夜は焼夷弾投下に悩まされ、また食料不足のため副食は芋の葉を少々浮かべた塩汁一杯程度の食事となり、厳しい作業も重なって体力的にも限界がみえ、精神力で

日々を過ごす始末でした。

そして心配していたB 29爆撃機の水平爆撃で露営地では多大の被害を受けたため、イラヤ山の中間陣地へ退避しました。しかし絶えず観測機の監視、さらに海上からの艦砲射撃で身動きも出来ず、また集中攻撃を避けるためにこちらからの銃砲の反撃も出来ない有様でした。食料は底を尽き、わずかに山芋を探し求め、食べられるものは何でも、蛙、蛇等の動物はもちろん、草木等を食べ、飢えをしのいだので、多数の栄養失調者やマラリア患者が出ました。

昭和十九年十一月、日本本土爆撃で損傷して基地に戻る途中、当地東海岸に不時着した米軍機から、オーストラリア兵の将校一人、下士官二人を捕虜としました。また、通信隊と島民との間でも電話線の切断、島南端イトブツト村の監視所での小銃の掠奪など小さい事件がありました。このころバタン島出身のフィリピン将校二人がバタン半島死の行軍から戻り、何か策略している情報の

ため嚴重に監視するよう指示がありました。

昭和二十年サブタン島とイボボス島の水道で、日本郵船の「サントス丸」（発動機艇）が座礁しました。この船にはトラック、火炮、小銃等多量の兵器や食料が積載されていましたが、サブタン島派遣の警戒兵の到着が遅れたためゲリラ隊に掠奪され、この武器が後に述べるサブタン事件に使用されることになりました。

私はイラヤ山での陣地構築中に足に怪我をし、それに体調も崩してマハタオ療養所に入所しました。快復後は谷奥衛生軍曹、水谷上等兵の許で療養所勤務に就きました。ここでは敵機の攻撃が二、三回ありましたが、バスコに比べ食料事情もよく、マハタオ派遣の奥藤班長の好意で第四〇五大隊のお世話になりました。

空襲の無い時間帯には住民と共に海岸に出て魚釣りや川で海老捕りなどをして、一部は薫製にして保存しました。マタハオの住民は我々に対して親切で、休日には度々山の別宅に招待されご馳走

になりました。

昭和二十年四月、サブタン事件が勃発しました。各町村にゲリラ隊が組織され暗躍しているとの情報が入り、いっどこで何が起こるか、緊張の日が続きました。横山第三〇二大隊長が台湾へ転出する送別会中に、イバナ地区警備隊の大杉隊長から、サブタン島との交信が絶えているとの報告がありました。

横山中佐は上海勤務当時の経験から何かあったことに気付いた様子でしたが、案の定既にサブタン島派遣の園田兵長以下十三人の対潜監視班、通信班、漁労班の兵が、朝のラジオ体操中にゲリラ隊の襲撃を受け、全員戦死の情報が入りました。そしてイバナのスペイン宣教師から「サブタン島で暴動が起き、日本兵と宣教師が殺されたらしい。私も狙われているので保護していただきたい」と申し出があり、宴会半ばに、兼ねて情報班でリストアップしていた人物を一斉逮捕し、イバナの裏山にある洞窟に収容しました。

最初にイバナ町長に尋問しましたが横柄な態度でなかなか口を割らないので両手を縛り天井からブラ下げました。しばらくして苦しくなったのか一切自白し、また他の百人近い逮捕者の証書でゲリラの全貌が判明しました。

昭和二十年五月十七日、ゲリラ壊滅のため、酒瀬川大尉指揮の混成二個小隊が二隻の舟艇に分乗、砲兵隊の援護射撃の下サブタン、イブホスの二島に敵前上陸敢行しました。町村には米国旗が掲揚され、あたかも米軍が駐屯しているかのように見せ掛けていました。

セントロ町長に対しては、以前に宣撫しているのでゲリラの人名等の提供を受け、攻撃前にイバヤット方面に逃れた首領パロネス大尉ほか二十人を除いたゲリラ隊全員を逮捕して、バスコ、イバナの二カ所で取り調べ、処刑は査問委員会に付託しました。横山中佐が重い刑罰に反対して情報主任の鈴木中尉に意見を申し立てましたが、台湾への転出前のことでしたので、その後旅団長がどの

ような判断したか定かではありません。

数日後、島民の犠牲者と日本兵の戦死者との合同慰霊祭を行い、島民から感謝されました。なお、横山中佐は六月二十日台湾に赴任しましたが、出発前に今後とも引き続き慰霊祭を行うようにと多額の金を特務班に渡して出発し、島民から再度感謝されたものでした。

昭和二十年七月三十一日、米軍がバタン島に上陸することがないとのことで、我が田島旅団は台湾転出を命ぜられました。輸送船の都合つかず引き続き駐屯することになりました。もし出発していたら、私はおそらくバシー海峡で魚の餌になり、今ごろあの世をさまよっていたと思います。

昭和二十年八月に入ってから、内地の情報が情報班から流れたことによりますと、米軍の空爆により東京全滅、広島に特殊爆弾が投下され、莫大な被害を受けたとのことでした。また当地では今まで定期的に飛来していた爆撃機の姿も少なくなり、気味の悪い静かな日が続きました。

二十日ごろ軍通信丸子班が避難している隧道内で高雄からの情報受信によりますと、日本は米国に対して無条件降伏したとありました。確認をとるため池田伍長ほか一人を伝令に出して司令部に報告したところ、情報担当の将校より「とんでもないデマだ、こんな情報を信用するような者は帝國軍人か」ときつく叱られ飛んで帰ってきました。

何日か過ぎ突如、司令部から旅団長伝達として「終戦の詔書を拝し恐縮に絶えず、バタン、バブヤン諸島の将兵は捕虜に非ず、神州の不滅を信じ隠忍自重せよ」とありました。いつかは、かくなる運命を予期していても、絶対口に出さなかった敗戦の日がついにきました。一部の将兵から玉砕、降伏をめぐって少々の論戦がありました。降伏することになり、下山して小学校などの広場に集結して米軍の武装解除を受けました。

昭和二十年九月二十四日、夜明けと共に米軍の上陸用舟艇に乗り、一年間ではありましたが、いろいろ思い出の多いバタン島を後にしました。

岸壁の陰から、米軍の目を避けて手を振る島民の方々に「お世話になりました、ありがとう」とお礼を告げ、涙ぐみ別れました。

昭和二十年九月二十五日、ルソン島北部のアバリに上陸しました。そして仮收容所に向かって行軍中、原住民から「バカヤロウ」「ドロボー」と罵られ、さらに石なども投げ込まれ、敗戦者の惨めさと日本軍のルソン島での行動が思い浮びました。アバリで二、三日滞在して乗船、マニラに到着、ここから無蓋車でカランバン收容所に到着しました。我々の到着を待っていましたとばかりに米兵や住民から、めばしい持ち物はすべて取られました。收容所での給食は米兵の横流し、ヤクザによるピンハネで、一日二食、それも粥に「錠剤」二個、または粥に乾葡萄が少々混入した雑炊でした。そして毎日の使役で体力が劣り、栄養失調患者も続出しましたので、米軍に給食並びに労働条件の改善方を具申した結果、徐々によくなりました。

昭和二十一年一月にマルキナ十七收容所へ移動

しました。移動しますと給食、労働条件などとも
によくなり、現地のフィリピン労働者との交際も
許され、土曜日の夜には演芸会を開いて我々を勇
気付けてくれました。しかし、社会からは隔絶さ
れ、鋭い監視の目のそぞぐ毎日が続きました。そ
していつになったら故国の土を踏めるだろう、暑
く寝苦しい夜は南十字星を眺め、日本はどの方向
だろう、皆元気だろうかと思ひ耽っていました。
夢も希望も定まらぬ捕虜生活でしたが日本の土を
踏むまではと、お互い助け合い、励まし合い、精
神力で生き抜こうと誓い合っていました。

十月に入ってから米兵や原地人の態度に変化が
見え、同時に内地送還が始まるとか、始まっている
とかの噂がありました。通訳を通じて原地人に
たまたたところ「他のキャンプでは既に帰国して
いる、貴方も近いだろう」と密かに教えてくれ
ました。胸につかえていた何かが一変に吹っ飛び、
久し振りに勇躍して作業が続けられました。

今年も残すこと一カ月、今年も駄目か、と思う

毎日でしたが「案ずるより生むが易し」、十二月に
入り「マルキナ十七キャンプ」を後にカラバン収
容所に戻りました。そして数日後、同所出発マニ
ラに向かいました。

マニラ港で待っていた引揚船は米国の上陸用舟
艇でしたので、またどこかに連れて行かれるでは
と不安に思ったのですが、乗船しますと日本の船
員が笑顔で迎えてくれ、「この船は帰還船として
米国から借りたもので、間違はなく日本に行きま
す」との一言を聞き皆抱き合い涙しました。

途中天候に恵まれ海上は穏やか、少々の船酔い
も夢心地、在り日のバタン、バブヤン諸島、台湾
の姿を左に眺めながら苦しかった島の思いを胸に
帰還船は一路祖国に向いました。

そして昭和二十一年十二月三十日、小学生当時
学んだ西海橋の下を通り長崎県大村湾に入り、橋
から手を振り迎えて下さる多くの方々に「ただいま
帰りました」と応えました。しばらくして下船
の指示があり、二度と踏むことは無いだろうと出

発した祖国の土を我々は涙ぐみながら第一歩を踏み付けました。そこでは頭からDDTを吹き掛けられ、身体検査、検疫も無事終わり、元大村航空隊の兵舎に二泊、政府から召集解除の書面と帰還手当として兵三百円、将校五百円、軍属千円が支給され、帰還専用列車で故郷へ向いました。

そして昭和二十二年一月一日、夕刻、自宅玄関の敷居を踏みました。町役場から連絡してあったので家族はもちろん、親戚、知人等が自宅で待っており、抱き合って祝福受け、新年祝いと二重の喜びを深夜まで分かち合いました。

復員時の家庭状況は、父は漆器木工業、母は専業主婦として健在、長男は戦時中の漆器需要不振により機械工として大阪の会社勤務中、三男は家具販売店で修業中、四男は配管工事会社で修業中、五男は父の元で漆器木工見習中でした。現在、父母及び三男は亡く、二男である私は父の後継者として長男、五男の協力を得て漆器木工業に励んでいます。そして二十二年復員した年の十二月結

婚し二人の娘がおります。最後に南海の孤島に眠る戦友諸兄の霊よ安かれと念じつつ、二度と戦争おこさない国、参加しない国であること願う者です。